

JSL 環境の日本語学習者を対象としたピア・ラーニングにおける 活動中の問題に対する学習者の意識

石 塚 健

1. はじめに

ピア・ラーニングが日本語教育に導入されて以降、作文教育におけるピア・レスポンス、読解教育におけるピア・リーディングを中心に実践や研究が数多く積み重ねられてきた。作文や読解以外の分野でも協働的¹な理念を基にした学習が取り入れられ、幅広い対象や観点からの分析が行われてきた。

筆者はこれまで日本国外で日本語を外国語として学ぶ学習者を対象にピア・ラーニングを取り入れた授業における学習者の意識について調査を進めてきた。対象となる学習者は主に韓国語を母語とする学習者であった。ピア・ラーニングは基本的に数多くの長所があることが教育現場でも認められ、学習効果の点においても肯定的な効果が得られることがわかってきた。

学び合いによって学習者が得ることのできる気づき、学習リソースの増大、情意面での負担軽減など多くの利点があるものの、実際の教育現場では現実的に様々な問題も発生することは事実である。これまでの研究においてもレベル差や学習意欲がピア・ラーニングの実施を困難にさせる要因として指摘されてきた。

筆者は近年、主に JFL 環境²で学ぶ学習者のピア・ラーニングにおける意識について

-
- 1 「ピア・ラーニング (Peer-Learning)」に関連する語として「協働」「協同」「共同」という言葉も使われるが、本稿では語学の授業など教室内での活動における協同的な学習については「ピア・ラーニング」という用語を使用する。そして、日本語教育における協同学習に対しては「協働」の漢字を用い、日本語教育も含めた人間が行う全般的な学習における協同に関しては「協同」の字を使用するが、「共同」の漢字は本稿では使用しない。ただし、参考・引用文献等に当該語句の使用がある場合には原典に使用法に準ずる。
 - 2 本稿では第2外国語としての日本語教育を JSL (Japanese as a second language)、外国語としての日本語教育を JFL (Japanese as a foreign language, JFL) とし、本文中の JFL 環境は主に本研究の先行研究にも関連する韓国における実践研究を指し、JFL 環境は今回調査で対象となった日本国内の大学で日本語を学習する環境を指している。

研究を進めてきた³。その中で、当初は学習者同士のレベル差が最も否定的な要因になると考えられていたが、実際に学習者の意識を調査していくと、レベル差よりも学習者の意欲や協力性という要因の方が大きくピア・ラーニングの成功要因の鍵となっていることがわかってきた。

ただ、これまでの研究は調査対象者がすべて JFL 環境で学ぶ学習者であり、実践研究の場も韓国の教育現場であったため、他の母語や国・地域の学習者、または日本国内で第二外国語として日本語を学ぶ JSL 環境の学習者についても同様のことが言えるかどうかについては実際に調査を試みなければわからない。

そこで、本調査ではこれまで筆者が調査してきた内容を JSL 環境で学ぶ学習者を対象に行い、どのような相違点があるのかについての比較を通して、学習者はどのような意識を持ち、どのような問題点が存在するのかという実態について分析する。また、問題点の原因を調査することでピア・ラーニングの改善点にはどのような示唆があるのかについても考察していく。そして、JSL 環境の学習者は日本の国内で学習をしているため日本人学生と接する機会が比較的多い。そのため、環境上の特性から日本人学生とのピア・ラーニングにおいて発生する問題点についても同時に考察していく。この点はこれまでの研究になかった新たな調査項目である。

本稿ではまず、これまでの韓国語母語話者を対象としたピア・ラーニングの実践研究の中から、本調査の基となった先行研究を概観する。次に調査概要を確認した後、本調査の結果の考察を進め、今後のピア・リーディングの展望および提言を行っていく。一連の調査を通して、問題点改善の道筋を見つけていることが本調査報告における主要な目的である。

2. 先行研究

まず、ピア・ラーニングの定義、目的、特徴について確認すると、ピア・ラーニングについて池田（2007）は「ピア・ラーニングは文字通りにはピア（peer：仲間）と協力して学ぶ（learn）方法」と定義しており、筆者もこの定義に準ずる。さらに池田（2007）はピア・リーディングの目的には作文や読解などの課題を遂行するという狭い意味での学習と仲間と学ぶことで人と人との社会的な関係を築くことを学び、さらに気づきを通して自分自身を発見していくという広い意味での学習の2つを挙げている。そして、ピア・リーディングの特徴は「学習の「過程」を「共有」する」という点であると述べている。

3 協働的な作文教育であるピア・レスポンスには石塚（2009a, 2011b, 2012a, 2015）があり、読解教育のピア・リーディングには石塚（2009b, 2010）がある。いずれも韓国語母語話者の日本語学習者を対象とした実践研究である。

(18)

次に、本調査のベースとなっている研究について見ていく。元の研究は2つあり、石塚 (2016a) と石塚 (2016b) であるが、これらの研究内容や方法は今回の調査でも生かされている。

石塚 (2016a) の研究は韓国語母語話者の日本語学習者を対象としたピア・ラーニングにおいて、ペアおよびグループ内のレベル差が存在する中で、レベル別の学習者の学びにはどのようなものがあるのかを明らかにすることが目的となっている。ピア・ラーニングの活動中に学習者がどのような学びや気づきを得ることができたと認識しているのかについて質問紙調査を中心に分析が行われた。対象者は韓国の大学で日本語を外国語として学ぶ 86 名の学習者であった。

さまざまな質問項目がある中でピア・ラーニングの授業における問題点についての質問があった。ペアやグループ活動の中で困ったこととしては、メンバーの非協力性やレベルの不一致よりも自分のレベルが低いため他のメンバーに申し訳ないという回答が最も多かったことが確認された。続いて活動中の問題への対処方法について問うものがあったが、そこでは先生や他のメンバーに相談するという回答や特に何もしないという回答があったものの、最も回答数が多かったのは一緒に頑張ろうと説得するという回答であった。

石塚 (2016a) で調査されたピア・ラーニングの授業における問題点についての回答は興味深いものであったが、実際の現場の状況を考えて場合、本当に説得するというような具体的な行動に出るのか疑問に思われる点も出てきた。そのため、実際の現場の実態をより深く理解するために質的調査であるインタビュー中心の調査を行い、より具体的な内容や実例を明らかにする試みが石塚 (2016b) で行われた。この研究ではピア・ラーニングの問題点の改善策や解決方法があるのかについて考察することが目的とされた。対象者は韓国の大学で日本語を外国語として学ぶ学習者 36 名であった。

結果として学習者同士のレベル差も重要ではあるものの、活動が成功するか否かの要因として学習者が最も強く意識しているのは他のメンバーの意欲や協力度であった。レベル差の違いは何とかなるものの、消極的で協力の姿勢が見られない所謂「やる気がない」場合は前に進まないといえられている。そして、その「やる気」も程度が重要で、ありすぎてもなさすぎてもいけないという点が明らかになった。

本稿では上記の2つの研究をベースに JSL 環境の学習者を対象とした質問紙調査およびインタビュー調査の結果を報告する。

3. 調査の概要

3.1 調査対象

今回の質問紙調査の回答者数は 48 名である。日本の某大学に通う外国人留学生の大

学生であり、国籍は多様でレベルも初級から上級まで広く含まれている。国籍は中国と韓国出身の学習者が比率としては多く、学習者の日本滞在歴は6ヶ月から2年未満であった。すべての被験者は筆者が担当した授業の受講生であり、ピア・ラーニングを導入した授業⁴に1学期間（15週）参加した。

〈表3〉質問紙調査の協力者数

中国	19	アメリカ	4	イギリス	1	フィンランド	1
韓国	11	ドイツ	2	スペイン	1	スウェーデン	1
シンガポール	2	フランス	2	プエルトリコ	1	メキシコ	1
オーストラリア	1	ベルギー	1				

〈表4〉インタビュー調査の協力者数

中国	16	フランス	1
韓国	2	ベルギー	1
スウェーデン	1	フィンランド	1

3.2 質問紙調査

質問紙調査は石塚（2016a）の内容を基にしているが、今回の調査ではJSLの学習者が主な対象者であるため、日本人学生との活動における問題点についての質問も加えた。調査は2018年7月上旬から中旬にかけて行われた。質問紙調査は無記名による記入であり、基本的には日本語による回答であるが、初級の学習者に対しては英訳した同内容の質問紙を希望者に配布した⁵。質問項目は「ペア活動で困ったこと」「グループ活

-
- 4 ピア・ラーニングを導入した授業とは協働学習および協同学習における基本的要素を満たした内容の授業ということである。例えば作文の場合はピア・レスポンス（*Peer-Response*）であり、読解の場合はピア・リーディング（*Peer-Reading*）の方法によって行われた。基本要素については池田（2007）では「対等」「対話」「創造」「プロセス」「互恵性」の5つが挙げられており、協同学習に関してはジョンソン他（2001）で「相互協力関係」「対面的-積極的相互作用」「個人のアカウンタビリティ」「スモールグループでの対人的技能」「協同活動評価」の5つが提示されている。
- 5 回答方法は各質問項目において共通して多く見られる回答内容については石塚（2016a）を参考に回答例を予め提示しておき、被験者は該当する内容があればチェックの記入を行う。また、回答数に関しては複数回答を可とし、質問紙に表示されている内容以外の回答がある場合は自由記述欄に記入する。本調査の質問内容および解答方法は石塚（2016a）に従った。

(20)

動で困ったこと」「問題が起こった際の解決方法とその結果」であり、今回の調査ではこれらに加えて「日本人学生とのペア・グループ活動で困ったこと」についての質問も行った。

3.3 インタビュー調査

インタビュー調査も質問紙調査同様に2018年7月上旬から中旬にかけて行われた。インタビュー調査の被験者は中級から上級の学習者である。一人あたりのインタビューの時間は15分から20分程度である。初級の学習者は日程の都合上、実施できなかったため対象者のレベルは中級から上級の学習者となった。調査内容は、主に質問紙調査の各項目に関する実際の実例と具体的な学習者の意識についての詳しい聞き取りであった。

4. 結果と考察

4.1 質問紙調査の結果

質問紙調査の結果を石塚（2016a）の結果と共に比較しながら考察を行っていく。表のJSLは今回の調査の結果のことであり、JFLは石塚（2016a）における結果を指している。

4.1.1 ペア活動における問題

〈表5〉はペア活動における問題について質問した結果である。ペア活動もグループ活動も協同的な活動であることは共通しているが、本調査ではそれぞれ分けて質問を行った。（ ）内のパーセントは被験者全体に対する割合を示している⁶。

〈表5〉 ペアの活動で困ったこと（複数回答）

回答項目	JSL	JFL
自分の能力不足でペアの人に申し訳ないと思った	28 (58.3%)	34 (39.5%)
ペアの人とレベルが合わない	18 (37.5%)	15 (17.4%)
ペアの人が協力的ではない	18 (37.5%)	9 (10.5%)
親しい人と一緒にペアになれない	7 (14.6%)	5 (5.8%)

JSLもJFLも類似した傾向を示す結果となったが、ペアの非協力性についてはJSLの方が比率としては高かった。非協力的なペアがいることに困るという回答も少なくな

6 表のパーセンテージの数字には「その他」の自由記述回答の数は含まれておらず、共通して得られた回答が割合表示の対象となっている。

いが、JFLと同様に自分の能力不足によりペアに迷惑をかけている、または役に立っていないことを否定的に捉えている学習者が多かった。これはグループに関しても同様のことが言えるが、ペアの場合は1対1で活動をするために、この点が非常に強く認識されやすいということもいえるであろう。

「その他」に書かれていた記述回答には「タスクの理解の方法がお互いに異なっていた」、「タスク達成のためにお互い異なる視点を持っていた」という回答があり、レベル差だけではなく、学習への姿勢や方法の違いも困る原因の一つになっている可能性がある。また、「クラスを離れると会う機会がないので、お互い遠くに住んでいるようだった」という回答もあり、授業時間だけの付き合いしか現実的にはないために、なかなか深く理解し合える関係にまでは発展しないという実情も推察できた。

4.1.2 グループ活動における問題

〈表6〉はグループ活動における問題について質問した結果である。グループ活動は3名以上の人数で全員が同じ目標を持って活動する場合を指す。

〈表6〉グループの活動で困ったこと（複数回答）

回答項目	JSL	JFL
自分の能力不足で他のメンバーに申し訳ないと思った	24 (50%)	30 (34.9%)
他のメンバーとレベルが合わない	18 (37.5%)	22 (25.6%)
メンバーが協力的ではない	19 (39.6%)	11 (12.8%)
親しい人と一緒のグループになれない	3 (6.3%)	6 (7%)

グループに関してもペアの場合と同様の傾向がJSLとJFLで見られたが、JSLではペアの場合と同じようにメンバーの非協力的性に対する否定的な回答の比率が多かった。しかし、最も多い回答は、いずれも自分の日本語能力が低いことによってメンバーに負担をかけていることへの申し訳なさであった。

「その他」の記述回答ではペアの場合と類似した回答があり、「異文化的な背景を持つ人と活動するとき、習慣や価値観などが異なる」、「みんなが自分のような性質や傾向ではないこと」というように文化的な違いによる価値観や習慣の違いを活動の中で感じる学習者がいることも確認された。これは多様な出身国の学習者からなるJSLの学習者には起こりやすいが、同じ母語を使う人間同士の場合が圧倒的であるJFLの場合ではそれほど見られない事例であると思われる。

質問が問題点について問うものであるために、否定的な回答が多いのは当然であるが、自由記述の欄には「グループメンバーはみんな素晴らしく、協力的だった」というように、全く問題を感じたことなどないと答えるケースも少数ではあるが存在した。

(22)

4.1.3 問題の解決方法

〈表7〉は問題が起こった際の解決方法について質問した結果である。

〈表7〉 問題発生時の解決方法（複数回答）

回答項目	JSL	JFL
一緒に頑張ろうと説得する	25 (52.1%)	33 (38.4%)
特に何もしない	13 (27.1%)	14 (16.3%)
先生に相談する	10 (20.8%)	12 (14%)
相手に注意する	13 (27.1%)	7 (8.1%)
他の友人に相談する	11 (22.9%)	10 (11.6%)

JSLもJFLもほぼ同様の傾向と比率が見られた。非協力的なメンバーに対して活動参加を促すために説得するという回答が最も多かったが、実際にどの程度深い説得であるかについては不明である。軽く声をかけた程度から協力的になるまで粘り強く話し合ったケースの両方が含まれていると思われる。記述回答にも複数見られたことであるが、メンバーが非協力的な場合は諦めて自分でやってしまうという方法をとる場合も少なくない。

「その他」の回答としては「過去の経験から、うまくいきそうなペアやグループを選び、うまくいきそうではない場合は避ける」というようなものや、「リーダーを決めてしまった方がよい」という回答もあった。また、相談に関しては、「相談するときは自分と同じ国の人とする」というように文化的な価値観や習慣の違いがある場合には同国の人に相談することが最善策と捉えられている。

続いて、〈表8〉は問題解決の試みの結果、解決したのかという質問への結果である。

〈表8〉 問題解決の試みに対する結果

回答項目	JSL	JFL
はい	32 (66.7%)	49 (57%)
いいえ	6 (12.5%)	6 (7%)
その他	6 (12.5%)	3 (3.5%)

いずれも同様の傾向が見られた。JSLでも解決したという回答が圧倒的に多かったが、実際にその通りなのかは疑問が残る。記述回答にあったように、うまくいくのは「いくつかのケースに限る」のが現実であり、「自分で大体やってしまった」というのが実情ではないかと思われる。

4.1.4 日本人学生との活動

〈表9〉は日本人学生とのピア・ラーニング活動の中でどのような困ったことがあったのかという問題点についての意識について質問した記述回答の結果である。記述内容を問題の原因の種類別にA・B・Cに分類した。分類に際してはKJ法を参考にした⁷。Aは「日本語能力不足」、Bは「日本人学生との異文化コミュニケーションギャップ」、Cが「日本人学生の意欲」である。A～Cに含まれない回答は「その他」とした。記述回答は原則として被験者の記述通りにしたが、日本語として誤用が明確な場合は意味を損なわないように注意して修正を加えた。そして、英文で書かれていた回答は筆者が日本語訳した。〔 〕内の数字は同内容の回答数を表している。

〈表9〉日本人学生とのピア・ラーニングの活動で困ったこと

A. 日本語能力不足
<ul style="list-style-type: none"> ・日本人は早く話すのでよくわからない。〔3〕 ・時々、文化の違いに戸惑うことがある〔2〕 ・自分の意見を話すときには文法が合っているか心配してしまう。 ・自分が話すときに、時間がかかってしまうかと心配する。 ・言語の問題でお互い理解し合えなかった。 ・互いに自分のいいたいことをうまく伝えられない。 ・私は、友達言葉は習ってこなかったので、うまくコミュニケーションできない。 ・言語能力の問題で自分の意見を十分に表現できない ・自分の日本語が下手なのでパートナーが関心を失った。 ・日本語でのコミュニケーションがうまくいかなかったため、結局自然と英語に変えた。 ・自分が外国人だから、違いについて言いにくい部分がある。 ・相手が方言で話すとわからない ・相手の言っていることがわからないので、わかったふりをする ・日本人との活動は言語のレベルが異なるために大変だと思うこともあるが、私自身は特に大きな問題はなかった。
B. 異文化コミュニケーションギャップ
<ul style="list-style-type: none"> ・日本人学生はシャイで自信がなさそうに見える。〔3〕 ・日本人学生は外国人留学生との活動をしぶしぶやっているようにも見える、おそらく照れているためだとは思いますが、自分はこれまで非常に情熱を持って協働学習に参加してきた。 ・日本人学生は外国人学生と話す機会が不足しているのではないか。

7 KJ法による分析方法については川喜田（1967, 1970）を参考にした。

- ・日本人学生は外国人学生に対して恥ずかしがっているようだ。
- ・日本人学生は自分の英語の発音を恥ずかしいと感じているようだ。
- ・交流しにくい交流できないわけではない。ただ、心を開くまで交流するのは難しい。
- ・日本人学生は自分の意見を言わない
- ・日本人はなかなか決められない、決断ができない。
- ・交流が少し難しい、それだけです。

C. 日本人学生の意欲

- ・自分の大学でのよい成績のためだけに活動している。
- ・ラインのグループトークでもメッセージを読まない人がいた。
- ・非協力的な人がいて、自分もやる気を失った。
- ・日本人学生が締め切り前日まで全然動かなかった。
- ・パワーポイントの15スライド中、12スライドを自分でやった。残りを頼んだが修正が必要となり、結局自分で全部やってしまった。
- ・あまり話そうとしない人がいた。
- ・協力しない人がいたが、なぜしないのかと話し合ってみたら、最終的には全員協力してよい評価をもらった。

D. その他

- ・お互いに忙しくて会う時間がなかった。
- ・自分はコツコツするタイプだが他のメンバーは最後に一気にするタイプの人たちだった。
- ・日本人と活動したことがほとんどない
- ・特に問題はなく、楽しかった。
- ・日本人学生は素晴らしく、私の経験では悪いことはなかった。
- ・日本人のペアを授業で付けた方がもっとうまくいくのではないか。

学習者自身の日本語能力が不足しているため、または不十分であると認識していることが原因となっている問題がAである。ネイティブの会話が聞き取れなかったり、方言が聞き取れずに日本人学生の話が理解できないために活動に参加できなかったりするという問題がある。また、自分自身の日本語がネイティブレベルではないために迷惑をかけているのではないかという引け目の意識も少なくない。

言葉の問題というよりもコミュニケーションのギャップを感じる事が原因の問題がBである。最も多いのは日本人学生が恥ずかしがってコミュニケーションを取ろうとしなかったり、英語に自信がないためにコミュニケーションを避けてしまったりすることである。それが活動への参加意欲が低いと留学生には受け取られてしまうケースがある

ことが推察される。

シャイで恥ずかしがっているというのではなく、協働での活動自体への意欲が見られなかったり、積極的な参加の意思がなかったりするために困るといのがCである。大学の授業に対する意識が低く、単位が取得できればよいという考えで適当に行動し、グループ活動において参加をしないために他のメンバーに迷惑をかけるケースである。留学生にとって大学の授業というのは重いもので、相当な努力と時間の投資が必要であると認識している場合が多いが、日本人学生の中には成績の評価には関心がなかったり、こだわらなかったりする人も少数ではあるが存在し、それが原因で取り組む姿勢や、意欲に差が出てしまうため活動に支障をきたしているのだと留学生が捉えている点が問題として浮き彫りになった⁸。

4.2 インタビュー調査の結果

〈表10〉はインタビュー調査の結果である。インタビューでもペアでの問題、グループの問題、そして問題への解決策について質問を行い、被験者の意識や意見の他に具体的な事例なども聞いた。そして、日本人学生との活動における問題点も同時に質問した。インタビュー調査ではJSLの学習者ということもあり、主に日本人学生との活動における問題点について回答する学習者が多かった。そのため、調査ではペアやグループの問題点についても質問を行ったが回答としては個別に出ることが少なく、日本人学生との活動における問題の中に含まれた形で回答されることが多かった。そのため、結果については4.1.4で分類したA～Cを枠組みとして回答を分け、同時に解決策についても記載した。

学習者の回答を分析した結果、中国語母語話者と韓国語母語話者という東アジアの学習者とヨーロッパ出身の学習者とは回答の傾向に違いが見られたために、便宜上回答は地域別に提示する。

8 この点については、あくまでも今回の被験者である留学生数名から共通して得られたコメントであり、日本人学生すべての状況を示しているわけではない。

〈表 10〉インタビュー調査の結果

中国・韓国	
A	<ul style="list-style-type: none"> ・関西弁がわからないので相手の発言が理解できない。(2) ・言いたいことを遠慮してしまい、日本人学生に言えないことが多い。 ・外国人の立場だといろいろ言いにくいこともある。 ・日本語に自信がないので、特に初めての人とは恥ずかしい。 ・日本人と交流する時、とても緊張する。 ・外国人同士だとお互い日本語を話すときに気楽だと感じる人が多い。 ・直接日本人学生に意見をしてしまって、申し訳ないと後で思うことがある。 ・日本人学生とする時、いろいろな事がなかなか決まらないのでイライラする。 ・日本人に指摘するのは何となく気まずいと思うことがある。 ・日本人学生と活動しているとき、何か言って変だと思われたくない。 ・日本語が不十分なので、中国人同士ならば中国語で説明できるのと思うことが多い。
B	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人学生は心を開かないように思える。 ・日本人学生はあまり自分の意見を言わないと感じることがある。 ・日本人はグループ好きだと思う。 ・留学生だからなのか、常に自分には「です・ます」で話されるので距離感を感じる。 ・中国人同士だとハッキリと言い合えるが、日本人にはどう対応してよいかわからない。
C	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に発言しない日本人学生が多い。 ・日本人学生の中でもやる人とやらない人で分けられると感じる。
解決策	<ul style="list-style-type: none"> ・自分がまず行動しないと、みんな動かない。 ・やはりリーダーがいなくともうまくいかないと思う。 ・誰もやらないなら自分でやってしまう。 ・協力的になるよう提案するが、だめなら諦める。 ・協力的でないならば、自分で仕切る。 ・やる気のない人がいても放っておく。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・実際には日本にいても日本人と接する機会は少ない。 ・ペアやグループもいいが、学生の解答が間違っている確率も高いと思う。 ・意見が分かれてしまった時、グループは意見がまとまりにくい。

フランス・スウェーデン・ベルギー・フィンランド	
A	※特に回答なし
B	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人学生の中には他の文化への共感がない人も多く見られる。 ・異文化に慣れていない人は価値観が自分基準になってしまっていると思う。 ・日本人学生の多くは英語に自信がないように見える。 ・異文化に慣れている学生は特に問題はないが、その経験がない学生は日本的な感覚のみを基準にして考えているように思える。
C	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人は単位や成績にそれほどこだわっていないように見える。 ・LINE グループのやりとりでも返信が遅い。 ・ヨーロッパの大学は厳しいので、みんな一緒にがんばるが日本人学生は切迫感がない。
解決策	<ul style="list-style-type: none"> ・うまくリードしてくれる人がいると、うまくいく。 ・やる気がない人がいれば、自分でやってしまう。 ・日本人学生の場合はこちらから質問を投げかけてあげるとうまくいきやすい。 ・グループのように人数が多ければうまくいく。 ・単に出席番号順でグループを割り振るのではなく、もう少し工夫が欲しい。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語のレベルが高い自分は多くの量を任されてしまう。 ・ペアの場合は逃げられないので負担は大きい。 ・日本人学生はいろいろ忙しくてスケジュールが合わない。 ・授業時間以外では合う機会が少ない。

中国や韓国の東アジア出身の学習者の回答を見ると、基本的には質問紙調査の結果と同様の結果となった。インタビューでも自分自身の日本語能力の不足により、コミュニケーションができなかったり、引け目を感じてしまうというような消極的な意識になったりするという回答が多かった。解決策としては日本人学生に積極的に働きかけて説得していくというよりは、うまくいかなければ自分でやってしまうと回答する学習者が多かった。その他にも「実際には日本にいても日本人と接する機会は少ない」という意見もあり、留学生の中には日本の大学にいても日本人学生と共に勉強したり触れあったりすることは現実的には少ないケースであることがわかった。

欧州出身の学習者からは A に関する回答はなかったが、全体としては日本人学生の国際性や異文化への理解に関する意見が多かった。外国の文化に興味があったり、留学や研修など異文化と触れ合う経験をしたたりした日本人学生とのコミュニケーションでは問題がないが、全く国際的な活動や異文化に興味や関心がない日本人学生の場合は対応

に苦勞するという回答がいくつかあった。そのような日本人学生の場合、日本の感覚や常識のみを基準にして考えて行動するため、コミュニケーションギャップが生まれやすいと感じている。

また、日本人学生の意欲に関する回答であるが、欧州出身の学習者の意識として自国での大学の授業や単位は非常に厳しいものであり、取得すること自体が困難であるという認識がベースとしてあるが、彼らから見ると日本人学生は大学の授業や成績評価にそれほど危機感や拘りはなく、授業関連の活動に取り組む際の姿勢や意識に違いが大きいと感じている。ただ、インタビューでは留学生自身の経験から改善策も述べられ、日本人学生と活動する際には自分から質問を投げかけたり話しかけたりすると比較的スムーズに進行することがあり、リーダーのように積極的に導いてくれる存在があるかないかが重要であるという意見もあった。

5. まとめ

JSL 環境で日本語を学ぶ学習者を対象に質問紙調査およびインタビュー調査を行った。質問紙調査の結果は JSL でも JFL でもほぼ同様の傾向を見せた。インタビュー調査の結果も同時に見ながら考察すると、レベル差も重要ではあるが、協力性・意欲などの所謂「やる気」が最も重要な鍵となってくるのが本調査でも確認された。

日本人学生との活動における問題については大きく 3 つの原因が考えられる。本稿では A～C に分類し、それぞれ「A 日本語能力不足」、「B 異文化コミュニケーションギャップ」「C 日本人学生の意欲」となった。学習者の出身国や地域によっても回答に違いが見られた。東アジアの学習者は自分の日本語能力に引け目を感じている場合が多く、それが原因となり日本人学生との活動に積極的に参加しにくい状況になる場合が多い。欧州の学習者からは国際性のある日本人学生かどうかのポイントとなるというコメントも得られた。日本人であるからというのは原因ではなく、国際的な多様性に理解があり自国の文化のみを基準とする言動をする日本人学生がいた場合は協働的な学習に支障を来す可能性が非常に高い。そして、東アジア、欧州のいずれも日本人学生がシャイで英語に自信がないと感じていることも確認された。英語に関して、発音やたどたどしさはマイナスとは捉えられていないが、日本人学生の中には完璧な英語出ない場合は、コミュニケーションはできないと意識しているケースが少なくないと思うという回答も得られた。

インタビュー調査から、うまくいかなかったケースの原因としてグループ編成をいい加減にした場合、その後のグループ内の活動もスムーズにいかないという事例が多いことも判明した。被験者による頻度の高い実態の報告として、単純に番号順にグループを振り分けられ、その後は放任状態という場合に失敗の可能性が非常に高い。メンバー同士が馴染むまでは、ある程度の時間が絶対的に必要であり、グループを組んだだけで終

わってしまうと学習者同士ではなかなか問題点を高い確率で改善することができない。メンバー同士に信頼が生まれ、活動に慣れてきた時期からは、任せてしまってもよいだろうが、それまではグループ編成から協働的な活動への取組み方など、丁寧に導入していかなければならない。特に国籍や文化的背景が異なるメンバー同士の場合は尚更であろう。

今回の調査から見えてきたことは、JFLの場合と同様にレベル差も重要であるが、学習者の協力度というものがグループ活動では大きな影響を与えるということであり、レベル差は克服可能であるが学習意欲のない学習者や参加の意志や態度が不足している場合は非常に難しい。積極的な態度に変えることは困難であっても、グループ活動の遂行に支障をきたさない程度に導いていく方法を探ることが今後の課題である。

改善策としては「適正な評価」「入念な事前調査を基にしたグループ編成」「協働学習に慣れるための丁寧な導入」「活動中のこまめなチェック」「学習者の責任感の意識化」がポイントになってくると考えられるが、これらに関しては今後の実践研究を通して解明を試みていきたい。また、本調査からいくつかの示唆が得られたが、この結果によって普遍的な結論を出すことは無理があり、ケーススタディーの一つの資料として貢献することはできるものの、学習者の意識についてより深く理解していくためには、様々な観点からの多様な調査や実践を継続的に重ねていくことが必要になってくると考えられる。

参考文献

- 池田玲子・館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門 ―創造的な学びのデザインのために―』 ひつじ書房 pp.5-8,51,71
- 石塚健 (2009a) 「JFL 環境の初・中級韓国語母語話者の学習者を対象としたピア・レスポンスの研究 ―質問紙調査の分析から見る協働学習の成功要因と授業デザインの可能性―」『東北アジア文化学会』18号 pp.423-446
- (2009b) 「韓国語母語話者の学習者を対象としたジグソー学習法による読解授業の試み」『日語日文学』44号、大韓日語日文学会 pp.183-201
- (2010) 「ピア・リーディングによる読解授業の問題点を探る」『日語日文学』47号大韓日語日文学会 pp.171-187
- (2011b) 「JFL 環境の韓国人学習者を対象としたピア・レスポンスの研究 ―ピリフ調査および中国人学習者との比較―」『東北アジア文化研究』28号 東北アジア文化学会 pp.451-467
- (2012a) 「JFL 環境の韓国人学習者を対象としたピア・レスポンスの研究 ―話し合いの言語およびグループを中心に―」『東北アジア文化研究』31号 東北アジア文化学会 pp.75-92

(30)

- (2015) 「JFL 環境の韓国人学習者を対象としたピア・レスポンスにおける学習者の意識の研究 —グループ内のレベル差の観点から—」 43号 東北アジア文化学会 pp.285-302
- (2016a) 「韓国語母語話者の学習者を対象としたピア・ラーニングにおけるレベル別の学習者の学びに対する意識 —上級者の学びを中心に—」 『日語日文学』 69号、大韓日語日文学会 pp.177-193
- (2016b) 「韓国語母語話者を対象にしたピア・ラーニングにおけるペアおよびグループ内の問題の実態と学習意識 —インタビュー調査を中心に—」 『東北アジア文化研究』 48号東北アジア文化学会 pp.285-304
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』 中央公論社
- (1970) 『続・発想法』 中央公論社
- ジョンソン, D.W.・ジョンソン, R.T.・スミス, K.A. (2001) 『学生参加型の大学授業 —協同学習への実践ガイド [関田一彦監訳]』 玉川大学出版 pp.144-145